本田家の概要と旧本田家住宅の文化財的価値

○所在地　国立市谷保5122-4

○本田家の沿革

本田家は 4代定之が馬医者として幕府に仕え、寛永年間（1624～1644）に谷保に移住したといわれています。ほどなくして名主となり、村政に携わります。江戸時代後期には漢方医として活躍するようになったことで、村医者、名主として村社会に貢献しました。また、文人書家として、市河米庵に入門したことを通じ、江戸の文人と広く交流がありました。幕末には土方歳三らとも深い交遊がありました。

明治期には戸長・村長を務め、時には私財を投じて国立の発展に寄与しました。13代定年(退庵)は多摩における自由民権運動の先駆けとして活躍した後、書家・篆刻家として活躍します。

その後も本田家は書家として活躍する中、近在の若者に書を教えていたこともあり「書家の家」として更に認識されます。戦後は市内在住の直木賞作家・山口瞳ら文化人と交流を持ち、篆刻作品を贈るなど、親交を深めていました。

このように、本田家は名主・医者・文人書家として、多彩な顔を持ち活躍していたことが判ります。旧本田家住宅や旧蔵資料にはこれらの足跡が残されており、多摩地域の歴史や文化を知る上で重要な存在であることが窺えます。

○建物概要

【主屋】構造形式：木造、入母屋造、茅葺（鉄板覆）、平入、一重、南面。
東南隅部曲屋は寄棟造、茅葺（鉄板覆）。
規　　模：建築面積80.97坪（267.63 ㎡）
棟高（柱 土台上端より棟木上端まで）・・・25.00尺（7.575m）

【表門】構造形式：一間一戸、薬医門、切妻造、銅板葺、一重、南面。
規　　模：平面積（柱内側面積）1.37坪（4.51 ㎡）
全高（礎石上端より大棟上端まで）・・・・25.00尺（7.575m）

○文化財名称・種別

名称・員数：旧本田家住宅　主屋、表門　2棟　土地付き
文化財種別：東京都指定有形文化財（建造物）

○東京都指定有形文化財（建造物）指定理由

本件は、代々下谷保村の名主を務め、漢方医、文人として活躍し、多摩における自由民権運動を支えた本田家の住居である。

主屋は、３本の大黒柱など江戸中期に遡る古い形式を残しながら、書斎など接客に供する空間が拡張され続け、意匠が整えられてきた。

表門は、江戸末期の建築とみられ、甲州街道に面して大きく構える敷地に庭があり、主屋とともに、名主家らしい屋敷構えを今に伝えている。

本件は、民家としては都内で最も古い時代の特徴を残すとともに、近代に至るまで民家建築の変遷の過程を示すものとして、かつ、江戸近郊の名主階級の発展の歴史を示すものとして歴史的・学術的価値が高い。

○建物の特性と変遷

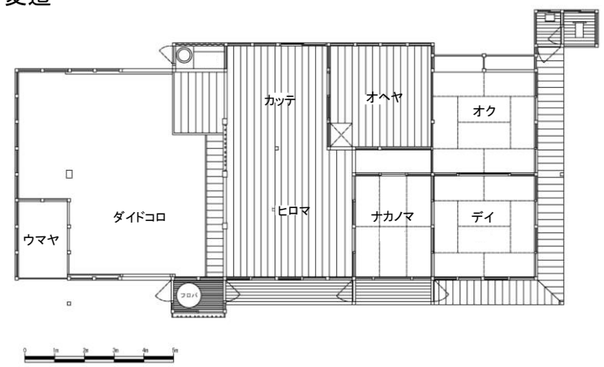

図1-1　旧本田家住宅当初平面推定図　（白井裕泰博士考案）

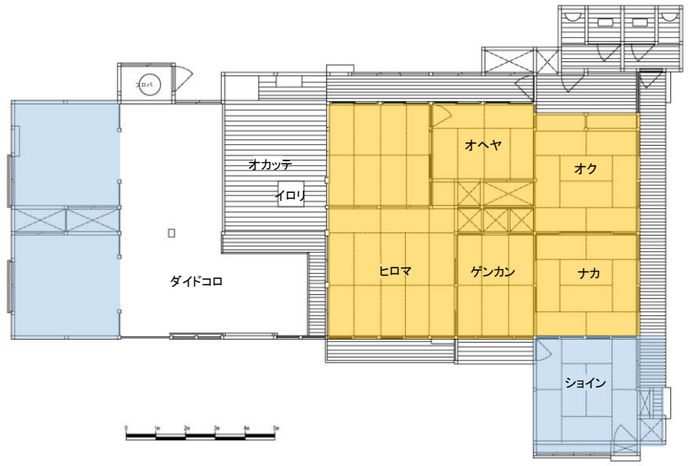

図1-2　旧本田家住宅中古平面推定図　（白井裕泰博士考案）

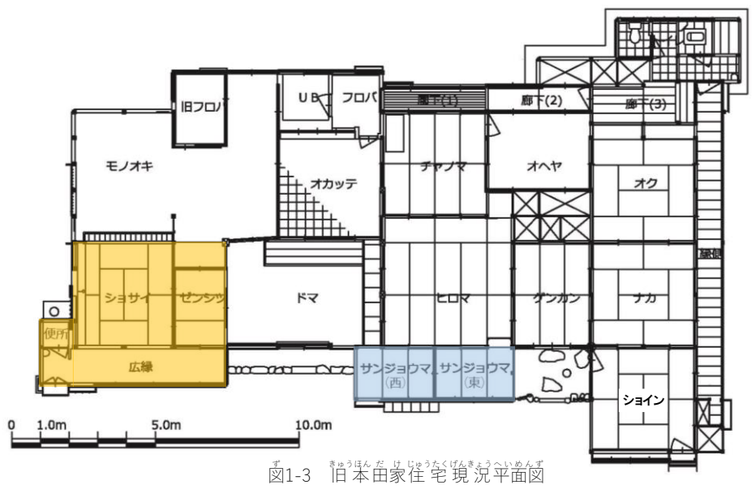

図1-3　旧本田家住宅現況平面図

江戸中期　本田家当主

・馬医や調馬を家業とし幕府に仕える。

建物の古い特性

・食違い六間取り
・3本の大黒柱
・床上の１間(1.818m)おきの柱
・小屋梁に平端のチョウナ仕上げ
・享保16年(1731)祈祷札　など

江戸後期における名主階層の住宅形式である整形六間形に先行する食違い六間形の平面形式を持ち、また、祈祷札より建築年代が享保16年以前であることがわかり、東京都における六間形形式の最古の遺構として貴重。
（白井裕泰博士所見より）

江戸後期　本田家当主

・名主・村医者として村社会に貢献する。
・村内の約５分の１を領有する大地主となる。
・書家、文人として活躍する。また、多くの文人墨客と交流を持つ。

主な建物の変遷

・接客の用途があった、ショインを増築
・座敷の意匠を格上げする改変
・ヒロマの床板を畳にし意匠を格上げする改変
・ダイドコロの西側を増築

名主として幕府の役人を迎えるため、また漢方医や文人として多くの人を迎えるため、平面の拡張や意匠の格上げの必要があったと推察できる。

明治時期　本田家当主

・戸長・村長として村政に関わる。
・多摩の自由民権運動の先駆けとなる。
・書家、文人、篆刻家として活躍する。
・近在の若者に書を教える。

戦後

・篆刻家として活躍。
・市内在住の作家や芸術家と交流を持つ。

主な建物の変遷

・江戸末期サンジョウマ(東)増築
・昭和10年(1935)サンジョウマ(西)増築
・昭和34年(1959)ショサイ、ゼンシツを改造
（他・水廻りの改築や土蔵の増築・除却など。）

接客や文化活動に供したとみられる空間が拡張され、近代においても、江戸期から継承された代々当主の文人的な側面を支える場として機能し続けた。

旧本田家住宅主屋の部屋の特徴

＜ゲンカン＞

本来は賓客用の玄関として作られた部屋で、畳が敷かれています。入口には二世中村蘭臺の刻した「大観堂」の篆刻額が架けられており、本田家が篆刻家として活躍していた様子が窺えます。

＜チャシツ＞

表門と同時期に増築されたと考えられています。室内は炉が切ってあり、戦後は地域の人々が茶道・華道や和裁を習いに来ていたそうです。

＜ナカ＞

レコードプレーヤー、洋服箪笥、座卓、火鉢等があり、昭和を代表する篆刻家である石井雙石の篆書体の扁額が飾られています。昭和20年代～30年代初頭には書斎として使われることもあったようです。北側中央の柱には享保16年（1731）の祈祷札、西側の柱には年代不明の高幡不動尊の祈祷札が打ち付けられていました。

＜オク＞

長く客間として使われていました。旧本田家住宅主屋では一番格の高い部屋であり、大田南畝や近藤勇が滞在したと伝わります。

＜ヒロマ＞

ゲンカンの西側に位置する主屋で最も広い部屋です。かつては炉が切られていましたが、戦前にはガス灯が点され籐の椅子が並ぶモダンな部屋だったそうです。北東隅には仏壇が配置され、その上方には祈祷札や木彫の神農像が祀られた神棚があります。仏壇脇には半間の押板があり、仏画等が飾られています。近年まで応接室として使われていたため、ソファーセットが置かれています。

＜東西サンジョウマ＞

いずれもヒロマ南側に増築された部屋です。東側は、増築時期は不明ですが、主に書斎として利用され、幕末期には住み込みの弟子たちの部屋としていたとも伝わります。西側は関東大震災以降に増設された部屋で、戦時中は疎開してきた人に貸すこともありました。両部屋共、ガラス戸は手延べの板硝子で、大正時代の面影を残しています。

＜ショサイ＞

昭和34年（1959）に改築して作られ、本田谷庵が書斎或いは来客の応対に使用していました。三畳のゼンシツが付属しています。

ショサイ北面には市河米庵から本田昂斎に贈られた扁額が掛けられ、壁一面が作り付けの書棚になっており、漢籍・印譜などが多数保管されています。床の間や本棚の上に置かれたり、壁に掛けられたりしている工芸品や色紙などは、篆刻印の返礼として受け取ったものなどです。また部屋の各所に積まれた資料には江戸時代に遡る文人資料も数多く存在し、戦後の文人精神を垣間見ることができます。

＜ドマ＞

大戸口正面の大きな台とその周辺の上がり端に刻字等が多数飾られています。倹飩箱や本棚には書籍や印譜帳、ガラス乾板等が収められており、ショサイ部分の延長と捉えて使われてきたと考えられる資料が多くあります。